



TITLE:

日本一のクラゲ天国田辺湾(53) ウ
ニヤドリクラゲムシ

AUTHOR(S):

久保田, 信

CITATION:

久保田, 信. 日本一のクラゲ天国田辺湾(53) ウニヤドリクラゲムシ. 紀伊
民報 2012

ISSUE DATE:

2012-02-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/180186>

RIGHT:

© 紀伊民報社

ウニヤドリクラゲムシ



白浜産の個体を基に新種記載されたウニヤドリクラゲムシ
(Tanaka, 1935改写)

52回で紹介したベニクラゲムシの仲間は田辺湾に5種いる。白浜のラップウニから発見されたウニヤドリクラゲムシは、岡田要京都大学教授の指導学生だった田中秀雄さんが発見して1931年に新種記載した。

その後発見されていないことや、ウニ類はいつも体表を掃除しているの生物が付きにくいことなどから、和名の「ウニ宿り」はちょっと怪しい。

これより以前に報告されたのは、刺胞動物門八放サンゴ亜綱に属するウミトサカ類の体表に付着するクラゲムシだ。京都大学瀬戸臨海実験所初代所長の駒井卓先生が神奈川県三崎で発見し、20年に新種記載している。今でも実験所北浜付近のウミトサカ類を観察すると、そのポリプの間からクラゲムシの触手が伸び出しているのが見える。京都大学水族館でも飼育展示されたこともあるくらいだ。しかし、本体はなかなか見づらい。

コマイクラゲムシは駒井先生に献名された種だ。実験所の内海富士夫先生が63年に新種記載したもので、昭和天皇が神奈川県葉山沖で最初に発見された。

69年に田辺灣に浮かぶ畠島で、ニセクロナマコの体表にいたベニクラゲムシらしき個体を山本虎夫先生が指導する学生が発見した。この個体は、実験所の時岡隆先生が、その年発刊の実験所欧文報告17巻で記載している。おとなのクラゲムシ類は肉眼で見えてるサイズであり、色が付いているのでなおさら発見率が高い。だから、これは偶然いたのであろう。

ありがたいことに、クラゲムシ類はホルマリン固定して標本として残せる。浮遊性の通常のクシクラゲとはこの点で大きく異なる。現に、2011年に日本産の新種として記載されたクシクラゲも、小さなものであったが、全個体とも残念ながら標本として残せなかった。

(京都大学准教授)

久保田 信

53

日本一の
クラゲ天国
田辺湾